

身心論の観点からみた瑜伽行派の人間観—アースラヤ識説を中心に—

山部 能宜
早稲田大学

近年私は、アースラヤ識の実践的背景を明らかにするという課題に取り組んでいる。本発表における基本的な仮説は、アースラヤ識は禅定体験を通じた身心の転換の文脈において見出されたのではないかというものである。アースラヤ識を含む唯識学説の背景に禅定の経験があったということ自体は必ずしも新しい視点ではないが、従来この件が具体的な文献資料に基づいて論じられることはあまりなかったように思われる。本発表では、特に横山紘一教授やシュミットハウゼン教授等の先行研究を参照しつつ、この問題を改めて考えてみたい。

転依 (*āśrayaparivṛtti*)のプロセスにおいて、修行者の身心は不自由な状態 (*akarmaṇya*, 不堪能) から、自由にはたらく状態 (*karmaṇya*, 堪能) へと転換する。この転換は身心において併行して起こるのであるが、特に肉体的な転換は重要であり、それが精神的な転換に対して及ぼす影響は無視できない。

瑜伽行派の体系において、アースラヤ識は身体の状態と密接な関係を保ちつつ生理的に身体を維持するものだと考えられていた。こうした身心の相関関係は「安危同一」(*ekayogakṣema*) と呼ばれ、アースラヤ識は利益 (*anugraha*) と損害 (*upaghāta*) を身体と共有する。この「利益」と「損害」は一般的な概念であって、さまざまな状況におけるものが含まれているが、禅定による快適感 (*praśrabdhi*, 軽安) と散心における不快感 (*dauṣṭhulya*, 僂重) のそれぞれによってもたらされるものも含まれているように思われる。したがって安危同一は、禅定の実践を通じて行者の身心が転換する過程における身心の相関関係をも含意するものであろう。

アースラヤ識は全身に遍満している。それ故、我々が生きている限り、それは肉体と不可分なのである。しかしながら、潜在的な生理的基盤としてのアースラヤ識の機能は、極めて微細であり知覚し難い。瑜伽行派の実践者たちは、彼らの身体の機能性がそうした微細な生理的基盤の状態に依拠していることに、禅定を通じて気づいていたのではないかと思われる。

以上のような点を考慮しつつ、仏教の修行における身体面の重要性に着目して、アースラヤ識説の意義を改めて論じてみたい。

キーワード：アースラヤ識、安危同一、僂重・軽安